

30	柳沼澤介と武俠社	92	47	文芸市場社復刻版『我楽多文庫』	149
31	『近代犯罪科学全集』と『性科学全集』	95	48	通俗性欲書と南海書院	152
32	『現代猟奇尖端図鑑』と『世界猟奇全集』	99	49	中山太郎と『売笑三千年史』	155
33	佐治祐吉の『恐ろしい告白』	103	50	丸木砂土『風変りな人々』と澤村田之助	158
34	今東光の『稚児』	106	51	シャンソール『さめやま』	161
35	今東光『奥州流血録』の真の作者生出仁	109	52	風俗資料刊行会の『エル・キタープ』	164
36	南方熊楠と酒井潔	112	53	戦前戦後の二見書房	167
37	岡書院の『南方隨筆』	116	54	西谷操と秋朱之介の『書物遊記』	170
38	岩田準一と田中直樹	119	55	尾崎久彌『江戸軟派雑考』	173
39	田中直樹『モダン・千夜一夜』と奥川書房	122	56	尾崎久彌と若山牧水	176
40	横山重と大岡山書店	125	57	異能の翻訳者矢野目源一	179
41	『岩つつじ』と「未刊珍本集成」	128	58	マリイ・ストープス『結婚愛』	182
42	古典文庫と『男色文献書志』	132	59	マリイ・ストープスと能	186
43	澤田順次郎の『神秘なる同性愛』	135	60	野村吉哉と加藤美侖	189
44	中野正人、花房四郎、『同性愛の種々相』	138	61	南柯書院と南柯叢書	192
45	宮武外骨と紅夢楼主人『美少年論』	142	62	平井功と『游牧記』	195
46	折口信夫「口ぶえ」	145	63	平井功『孟夏飛霜』と近代文明社	198

64	典文社印刷所と蘭台山房『院曲サロメ』	201
65	南宋書院、涌島義博、田中古代子	204
66	宮本良『変態商売往来』と松岡貞治『性的犯罪雑考』	207
67	三谷幸夫訳のヴォルテール『オダリスク』	210
68	ダイテロ『不謹慎な宝石』とディドロ『お喋りな宝石』	213
69	松村喜雄『乱歩おじさん』と『江戸川乱歩殺人原稿』	216
70	江戸川乱歩と中央公論社『世界文芸大辞典』	220
71	江戸川乱歩と「J・A・シモンズのひそかなる情熱」	223
72	乱歩、谷崎潤一郎、クラフト・エビング 『変態性欲心理』	226
73	乱歩以後のJ・A・シモンズ	229
74	エドワード・カーペンターと石川三四郎	232
75	アンドレ・ジイド『コリドン』	236
76	ハヴロック・エリスの日月社版『性の心理』	239
77	『性の心理』と田山花袋『蒲団』	243
78	田山花袋とゾラの英訳	246
79	田山花袋と近代文明社『近代の小説』	249
80	『性の心理』と『相対会研究報告』	253
81	『性の心理』とナボコフ『ロリータ』	256
82	大槻憲二と『フロイド精神分析学全集』	259
83	木村鷹太郎訳『プラトーン全集』	263
84	花咲一男と岡田甫	266
85	日輪閣『秘籍 江戸文学選』	269
86	平井蒼太と富岡多恵子『壺中庵異聞』	273
87	探偵小説、民俗学、横溝正史『悪魔の手鞠唄』	276
88	六人社版『真珠郎』と『民間伝承』	280
89	探偵小説、春秋社、松柏館	283
90	梅原北明『殺人会社』とジャック・ロンドン『殺人株式会社』	286

91	大内三郎『漂魔の爪』と伊藤秀雄『明治の探偵小説』	290	104	『世界聖典全集』と世界文庫刊行会	332
92	ヴァン・ダイン、伴大矩、日本公論社	293	105	国民文庫刊行会『国訳大蔵経』	338
93	八切止夫と日本シエル出版	297	106	望月桂、宮崎安右衛門、春秋社	341
94	森下雨村と西谷退三訳『セルボーンの博物誌』	300	107	小出正吾『聖フランシス物語』と厚生閣書店	345
95	改造社『世界大衆文学全集』と中西裕 『ホームズ翻訳への道―延原謙評伝』	304	108	春山行夫と小谷部全一郎『日本及日本国民之起原』	348
96	渡辺温と『ポー・ホフマン集』	307	109	高島嘉右衛門、高木彬光『大予言者の秘密』、神宮館	351
97	岡本綺堂と『世界怪談名作集』	310	110	酒井勝軍と内外書房『世界の正体と猶太人』	354
98	『心理試験』と中村白葉訳『罪と罰』	314	111	久保田栄吉訳『驚異の怪文書ユダヤ議定書』とノーマン・コーン『シオン賢者の議定書』	358
100	新光社『心霊問題叢書』と『レイモンド』	320	112	四王天延孝『猶太思想及運動』と内外書房	362
101	コナン・ドイルと英国心霊研究協会	323	113	藤沢親雄、横山茂雄『聖別された肉体』、	
102	黒岩涙香『天人論』とマイアーズ『靈魂不滅論』	326		チャーチワード『南洋諸島の古代文化』	365
103	黒岩涙香と出版	329	114	ローゼンベルク『二十世紀の神話』と高	

	田里恵子『文学部をめぐる病い』	369			
115	バハオーフェンと白揚社版『母権論』	374	125	「パリの日本人たち」と映画	414
116	第一書房版『我が闘争』と小島輝正『春山行夫ノート』	378	126	『伊太利亞』、『イタリア』、『戦争文化』	419
117	ヴァイニンガー『性と性格』とダイクス トラ『倒錯の偶像』	382	127	アルス版「ナチス叢書」と『世界戦争文 学全集』、ゾラ『壊滅』	423
118	シュペングレー『西洋の没落』、室伏高信、 批評社	385	128	ロバート・キャパ『ちよつとピンぼけ』 とダヴィッド社	427
119	ハウスホーファー『太平洋地政学』と太 平洋協会	389	129	田代金宣『出版新体制の話』と昭和十年 代後半の出版業界	430
120	平野義太郎と『太平洋の民族Ⅱ政治学』	393	130	座談会『世界史的立場と日本』、米倉二 郎『東亜地政学序説』と高嶋辰彦	434
121	高楠順次郎『知識民族としてのスメル 族』、スメラ学塾、仲小路彰『肇国』	397	131	生活社、鐵村大二、小島輝正	438
122	小島威彦『百年目にあけた玉手箱』、戦 争文化研究所、世界創造社	402	132	富沢有為男『地中海』、『東洋』、『俠骨一代』	442
123	小島威彦『世界創造の哲学的序曲』と西 田幾多郎	407	133	仲小路彰のささやかな肖像	446
			134	厚生閣『日本現代文章講座』と春山行夫	449
			135	三富朽葉と大鹿卓『獵矢集』	453
			136	国柱会、天業民報社、宮沢賢治	456
			124	国民精神文化研究所と科学文化アカデミア	410

137	人文書院と日本心靈学会	460	149	草村北星、隆文館、川崎安『人體美論』	505
138	円地文子の随筆集『女坂』	463	150	刀江書院『シユトラツツ選集』と高山洋吉	509
139	田中守平と太靈道	466	151	隆文館の軌跡	512
140	松田甚次郎『土に叫ぶ』と羽田書店	470	152	草村北星と大日本文明協会	516
141	島木健作『生活の探求』と柳田民俗学	474	153	埴谷雄高とヘッケル『生命の不可思議』	520
142	肥田春充『国民医術天真法』と村井弦斎	478	154	龍吟社、大本教、『白隠和尚全集』	524
143	岡田虎二郎、岸本能武太『岡田式静坐三年』、相馬黒光	481	155	財政経済学会と『新聞集成明治編年史』	528
144	三井甲之と『手のひら療治』	484	156	国木田独歩『欺かざるの記』、佐久良書房、隆文館	532
145	安彦良和『虹色のトロツキ』、『合気道開祖植芝盛平伝』、出版芸術社	488	157	建築工芸協会、岡本定吉、大塚稔	536
146	桜沢如一『食物だけで病気が癒る新食養療法』と『新食養療法』	492	158	龍吟社と彰国社	539
147	「赤本」としての築田多吉『家庭に於ける實際的看護の秘訣』	496	159	草村北星『戦塵を避けて』、原智恵子、『シヨパン・ピアノ曲全集』	543
148	三浦関造『革命の前』、ブラヴァツキ、竜王文庫	500	160	小川菊松、宮下軍平『書画骨董叢書』と今泉雄作『日本画の知識及鑑定法』	547
			161	吉澤孔三郎と近代社『世界短篇小説大系』	551
			162	誠文堂『大日本百科全集』の謎	554

163	田口掬汀、日本美術学院、『美術辞典』	558	177	窪田十一と『人肉の市』	605
164	黒田鵬心と「趣味叢書」発行所	561	178	中村武羅夫『文壇隨筆』	608
165	『新声』、『明星』、『文壇照魔鏡』事件	564	179	春陽堂『新小説』と鈴木氏亨	612
166	博文館と巖谷小波『金色夜叉の真相』	568	180	『文藝春秋』創刊号、田中直樹、小峰八郎	615
167	新潮社と小栗風葉『終編金色夜叉』	571	181	加藤武雄と『近代思想十六講』	619
168	広津和郎、芸術社『武者小路実篤全集』、大森書房	574	182	松本清張と木村毅『小説研究十六講』	623
169	村松梢風と『騷人』	577	183	『私の文学回顧録』	627
170	未刊の『大正文学全集』と佐藤耶蘇基	581	184	農民文芸会編『農民文芸十六講』	631
171	『飢を超して』	585	185	和田伝編『名作選集日本田園文学』と加藤武雄「土を離れて」	635
172	大泉黒石『老子』、仲摩照久、新光社	589	186	和田伝『沃土』	638
173	麻生久『黎明』、大鏡閣、『解放』	592	187	中村星湖「この岸あの岸」と初訳『ボヴァリー夫人』	642
174	新光社と『日本地理風俗大系』	595	188	吉江喬松「百姓、土百姓」と新潮社『フィリップ全集』	645
175	江原小弥太、越山堂、帆刈芳之助	599	189	春秋社『ゾラ全集』と吉江喬松訳『ルゴン家の人々』	
176	阿野自由里『ミスター弥助』	602			
	新潮社「感想小品叢書」、菊池寛『わが文芸陣』、『座頭市地獄旅』				

189	企画編集者としての吉江喬松と中央公論社『世界文芸大辞典』	649	200	庄野誠一「智慧の環」と集英社『日本文学全集』	687
190	ゾラの翻訳者としての武林無想庵	653			
191	改造社「ゾラ叢書」、犬田卯訳『大地』、論創社「ルーゴン・マッカール叢書」	656			
192	「ルーゴン・マッカール叢書」（論創社版）邦訳完結に寄せて	660		あとがき	692
193	大正時代における「ルーゴン・マッカール叢書」の翻訳	664		人名索引	727
194	特価本出版社成光館	668			
195	ゾラの翻訳の先駆者飯田旗軒	671			
196	井上勇『フランス・その後』とゾラ『壊滅』	674			
197	島中雄三、文化学会、『世界文豪代表作全集』	677			
198	『居酒屋』の訳者関義と『展覧会の絵』	680			
199	砂子屋書房「新農民文学叢書」と丸山義二『田舎』	683			

1 『奇譚クラブ』から『裏窓』へ

近代出版史探索の扉を開くにあたって、まず『奇譚クラブ』から始めることにしよう。何よりもこの雑誌の戦後史こそは、戦前の出版業界の地下水脈とつながり、赤本業界と所謂「エロ雑誌」世界の歴史を克明に物語っているからである。だが私はこの雑誌をリアルタイムに読んでいただけでも、愛読者であったわけでもない。ただ戦後出版史の裏面を形成する人脈、『奇譚クラブ』を発端とするSM雑誌の系譜、それらを発行した出版社とその流通に関心を持っているだけなので、内容についての詳細な言及は他にゆずることにする。

昭和二十二年十月に『奇譚クラブ』はカストリ雑誌として大阪の曙書房から創刊された。山本明の『カストリ雑誌研究』（出版ニュース社）には創刊号の表紙が掲載され、「カストリ・大衆娯楽雑誌年表・解説」によれば、「42 p・22円」とある。カストリ雑誌からSM雑誌へと本格的に移行したのは二十七年になってからとされ、昭和五十年に終刊になるまで、休刊した時期もあったが、四半世紀にわたって読み継がれてきた特異な雑誌といえよう。木本至は『雑誌で読む戦後史』（新潮社）の「奇譚クラブ」の項で、「その表紙に触れるだけでも戦慄が走る一種危険な雑誌『奇譚クラブ』、戦後の裏文化の帝王とも評せる雑誌」と書いている。その面影は復刻アンソロジーの高倉一編『秘密の本棚Ⅰ・Ⅱ』（徳間文庫）を繰ってみれば、すぐにわかるだろう。

木本の記述に加えて、北原童夢と早乙女宏美の『奇譚クラブ』の人々』（河出文庫）を参照すると、

軍属の新聞記者だった吉田稔が、戦後の大阪の焼け跡で同じ隊にいた須磨利之と出会う。吉田はすでにカストリ雑誌『奇譚クラブ』を発行していたが、売れ行きは芳しくなかった。そこで須磨に相談すると、須磨自らが実質的な編集長となり、自らの性癖に基づきS M変態総合雑誌へと変身させた。一人で何役もこなし、喜多玲子の名前で縛られた女の絵を描き、高月大三としてS M時代小説を書き、モデルを縛つての写真撮影もこなした。『奇譚クラブ』は取次を通さない直販雑誌で、吉田が書店と直接取引を行ない、五千部から七千部を刊行していたが、S M変態総合雑誌となつてからは三万部発行するようになり、完売するほどだった。

須磨は京都美術学校を卒業し、日本画家を目指していたこともあり、画家、作家、繩師、カメラマンも兼ね、『奇譚クラブ』を凡百のカストリ雑誌からS M変態総合雑誌へと仕立て上げた人物であった。だが発行人の吉田は須磨と異なり、アブノーマルな性癖はもつていなかったにもかかわらず、株で儲けた金を『奇譚クラブ』に注ぎこみ、発禁や嫌がらせに抗して、雑誌を刊行し続けた。それは第五号に「我々は、如何なる権力に対しても、絶対に恐れず、おびえず、てらはず、おほらかな気持でもつて発行を続けてゆく」と記した吉田の意地も絡んでいた。

しかしこのような性癖の異なる二人の関係は長続きするはずもなく、吉田と意見が食い違ふようになり、須磨は二十八年に雑誌から手を引いてしまう。それに続いて、三十年まで連続して毎年摘発押収を受け、吉田は三十年に半年ばかり休刊に追いこまれた。「当時の出版警察にとつて『奇譚クラブ』壊滅は第一目標であつたと思われる」（木本至）。だが熱烈な読者の要望もあり、復刊に至つたことが作用してか、三十一年十二月号から沼正三の『家畜人ヤプー』の連載が始まる、また団鬼六（最初のペンネー

ムは花巻京太郎)が三十三年七月号にSM小説「お町の最期」を投稿し、三十八年八・九月号から八年にわたって書き継がれることになる『花と蛇』へつながっていく。沼正三や団鬼六ばかりでなく、多くの読者たちが投稿から始めて常連の執筆者となり、作家や画家としてデビューしたことも、『奇譚クラブ』の大きいなる特色であろう。

その一方で須磨は、おそらく高橋鉄の性風俗誌『あまとりあ』の口絵の依頼がきっかけとなったと思われるが、上京して日本特集出版社(日本文芸社)の『風俗草紙』の編集に携わる。『あまとりあ』の版元である久保書店で、ハードボイルド専門誌『マンハント』の編集長を務めていた中田雅久の証言によれば、日本文芸社の編集責任者氏家富良が須磨を招聘したという。そして須磨は久保書店の『裏窓』の編集長も引き受け、大阪で芽生えたSM変態総合雑誌が東京へと移植、伝播するきっかけとなるのである。その後実際に須磨は美濃村晃と名乗り、いくつものSM雑誌を誕生させることになる。

『奇譚クラブ』の流通が書店との直接取引であったことは既述したが、発行所は曙書房から始まり、三十年に天星社、四十二年に暁出版となつていく。昭和三十年代後半から各県の有害図書指定を受け始めている事実からの推測だが、この時期に取次口座を開き、新刊書店ルートでの販売が可能になったのではないだろうか。昭和三十二年に団が『奇譚クラブ』と出会ったのは新宿の古本屋の店頭においてだった。とすれば、この時代まで主として『奇譚クラブ』は赤本や特価本業界の流通ルートで販売されていたとも推測される。日本文芸社も久保書店も、この業界の出身と見なしていいからだ。大阪と東京の赤本業界は緊密につながり、その中で『奇譚クラブ』から『裏窓』に至る流れが形成されたと思われる。

そしてコーンはさらに付け加えている。「ユダヤ人世界支配陰謀神話はまだ絶命していない。また別の偽装の下に蘇ろうとしている」と。これもまた確かにそうなのだ。現在でもユダヤ人陰謀神話本の出版は後を絶たず、他ならぬ「日出る国」でも延命している。それは偽書『プロトコル』の影響がまだ終焉していないことを示しているよう。

112 四王天延孝『猶太思想及運動』と内外書房

『驚異の怪文書ユダヤ議定書』の「訳者の言葉」において、久保田栄吉はユダヤ研究の権威として、「四王天延孝閣下及安江陸軍、犬塚海軍其他の先輩」の名前を挙げ、謝辞を恩師の相馬愛蔵、黒光や杉山茂丸などに掲げている。後者の相馬夫妻や杉山のこととはひとまずおくが、前者の名前は久保田のユダヤ研究が軍部の人々と歩調を合わせ、進んできたことを語っている。

しかも四王天たちは既述した酒井勝軍の著書の版元である内外書房から、いずれもがペンネームでユダヤ問題に関する著作を刊行している。彼らのペンネームは宮沢正典が『ユダヤ人論考』（新泉社）で指摘しているように、四王天延孝＝藤原信孝、安江仙弘＝包荒子、犬塚惟重＝宇都宮希洋である。

内外書房によったすべての著者たちが判明しているわけではないが、これまで名前を挙げた人々を考えると、酒井や樋口艶之助＝北上梅石は神学校出身、四王天たちは語学に通じ、特務機関に関係する軍人で、彼らの共通点はシベリア出兵体験と従軍、ロシア革命とボルシェヴィキへの注視であろう。また国内における大正デモクラシーへの反発も共有していたと思われる。そうした彼らが内外書房と手を携

え、『プロトコル』に基づく反ユダヤプロパガンダを繰り返していったのである。彼らが行なった全国各地での夥しい講演を、内外書房は本や小冊子として刊行した。その内外書房について、管見の限り出版史における言及を見ていないし、全貌も発行人の舟越石治のこともわからない。ただ外務省の外郭団体で、『国際秘密力の研究』（後に『猶太研究』）を出していた国際政経学会の関係者との推測はつくにしても。

しかし内外書房が行なった反ユダヤプロパガンダを称して、宮沢は『ユダヤ人論考』の本文ではなく、注の部分で「内外書房の熱烈な肩入れ」と見なし、同社の大沢鷲山『日本に現存するフリーメーソンのリー』や武藤貞一『ユダヤ人の対日攻勢』の巻末やカパーに寄せられた出版者の言葉を引用している。この二冊は入手していないので、宮沢の同書から再引用する。

「大正十二年の大震災直後から小房が発行したユダヤ研究に関する諸先生十余種の著述は計らず憂国の各位より大好評を受け、この種の出版を続行するやう絶えず激励せられました。厚く感謝します。」

「願ふ、関東大震災の劫火未だ消えさらざる時、切に猶太研究の先覚の諸先生に願ひ、『猶太禍』『猶太人の世界政略運動』『猶太民族の研究』『共産党の話』『猶太人の大陰謀』『世界の正体と猶太人』を発行、好評絶讃普及実に四万冊を突破、更に、『何故の露国承認ぞ』『自由平等友愛と猶太民族』『皇国を呪ふ二重陰謀』の三小冊子五万を全国的に無料配布せし等、小房が報国一片の赤心、此の驚くべき猶太禍を警告せしは、諸者各位の尚御記憶せらるゝであらう云々。」

これらのおそらく発行人の舟越の言葉によって、内外書房が関東大震災後に立ち上げられ、それに続く昭和経済恐慌の中で、書名に象徴される反ユダヤ人言説が日本中に撒き散らされていった状況がまぎ

まざと浮かんでくるような気がする。それに次回言及するナチズム文献の翻訳と研究書の出版が相乗し、さらに多くの周辺出版物が加わり、確たる分野を形成したと考えて間違いないだろう。

その集大成的一冊が陸軍中将の位を冠した四王天延孝の『猶太思想及運動』（ただし箱表記はユダヤ）で、これは昭和十六年にもちろん内外書房から刊行されている。菊判五百ページ余、内容はユダヤ民族の歴史と思想、その秘密結社フリーメイソンがフランス革命、アメリカ独立革命、ロシア革命、第一次世界大戦に及ぼした影響、及び東洋政策、満州事変、第二次世界大戦への関与、日本とユダヤ問題に付け加え、「付録」としてフランス語からの彼自身の翻訳『シオンの議定書』の収録もある。したがって同書は四王天が戦後になって著わした『四王天延孝回顧録』（みすず書房）で述べているハルビン特務機関時代の正十年頃に大連で印刷し、菊判二百ページ、五百部にまとめたユダヤ研究から始まる到達点を示していよう。

『四王天延孝回顧録』や人名事典によれば、彼は日露戦争を経て陸大を卒業後、フランス語やロシア語を修得し、教官などを務め、第一次世界大戦において三年間フランス軍に従軍し、帰国後は前述のハルビン特務機関の他に陸軍航空学校、陸軍省、国際連盟を経て、衆議院議員にもなっている。そのかたわらで、彼が反ユダヤ運動に携わってきたことは明白だが、『回顧録』にユダヤ研究やそのための民族研究会の創立は書かれていても、それらの詳細や内外書房から出した本については記されていない。それゆえに彼の戦後の『回顧録』は、反ユダヤ言説やプロバガンダの渦中にいた自らを描いているとは言い難い。これが昭和十年までの記録だとしても、意図的に省かれていると考えるしかない。だが彼は第二次世界大戦がユダヤの陰謀だとの説を終生変えていなかったはずだ。

それでも四王天が『回顧録』を執筆したことに比べ、安江仙弘は敗戦時にも満州国政府顧問としてとどまり、ソ連軍に捕らえられ、シベリアに送られ、ハバロフスクで死亡。犬塚惟重はこれも敗戦の際にマニラで逮捕され、捕虜虐待容疑で戦犯裁判にかけられ、その後釈放され、日本に戻り、日本イスラエル友好協会に加わっていたが、戦時中に反ユダヤ主義であったことが発覚し、それを退会せざるをえなかったようだ。また内外書房の舟越石治の消息はまったくつかめない。四王天以外の三人が何らかの記録や証言を残していれば、もう少し内外書房の出版物とプロパガンダに象徴的に表出した、大正末から昭和にかけての日本における反ユダヤ主義のくつきりした軌跡が描けたように思えるが、それはあきらめるしかない。

そのことを無視して、M・トケイヤーたちの『河豚計画』（加藤明彦訳、日本ブリタニカ）や赤間剛の『日本ユダヤ陰謀の構図』（徳間書店）へ飛躍してしまうのは、資料的に心もとないように考えられるので、ここで止める。

113 藤沢親雄、横山茂雄『聖別された肉体』、チャーチワード『南洋諸島の古代文化』

前回『猶太思想及運動』や『四王天延孝回顧録』の四王天が、バリやジュネーブの国際連盟に出向していたことは既述したが、それは大正十三年から昭和二年にかけてだった。彼は『回顧録』の中でそれを、「現職生活中公私共に最も印象深いものの一つ」と述べていた。同時代の国際連盟に深く関わった日本人がいる。それは藤沢親雄で、彼は大正八年に元満鉄総裁松岡均平に随行し、その前年から同連盟

人 名 索 引

本書の索引ページは太字、『古本屋散策』の索引ページは細字で示す。

- あ行**
- 相生垣瓜人 493, 495
 相田良雄 474
 E・M・ナサンソン 515-16
 アウグスチヌス 408
 アウリツチ 419
 饗庭篁村 612 81, 270
 蒼井雄 286
 青江舜二郎 90 165, 284
 青木信光 254 203
 青木晃 585
 青木日出夫 143-45, 410
 青木昌彦 195
 青柳瑞穂 274, 313
 青山光一 209
 青山二郎 475, 477 33
 青山督太郎 33
 青山虎之助 36
 青山道夫 376
 青山南 439
 青山倭文二 44
 赤木圭一郎 366
 赤木洋一 205
 赤田祐一 489
 赤堀又次郎 29
 赤間剛 365
 赤松磐田 270
 赤松連城 136
 阿川弘之 571
 秋朱之介（西谷操） 170-73,
 179-80, 192, 194-95, 198,
 201, 207-08, 214-255 55
 秋田雨雀 65, 677 361-62
 秋庭俊彦 665
 秋元松代 369
 秋山健二郎 378, 482
 秋山定輔 579
 秋山龍三 209
 秋吉巒 23
 芥川潤 162
 芥川龍之介 187, 253-55, 603,
 610, 612, 615 397
 アーサー・キャンベル 461
 アーサー・シモンズ 457-58
 アーサー・マッケン 454
 181-82, 185-86, 197, 202
 浅井康男 29
 朝丘雪路 492
 朝倉治彦 134
 浅田彰 442-43
 浅田孝 623 244-46
 阿佐田哲也 436
 浅田一 96
 浅沼稻次郎 541-43
 浅野晃 36, 555
 浅野徹他 532
 浅野和三郎 460, 525 42
 朝吹登水子 122-23
 朝吹亮二 469
 浅見淵 157-62, 165
 朝山新一 256
 足助素一 66 171-73, 336,
 362
 足助たつ 172
 アスパシヤ・ライス 41
 麻生久 589-592
 足立欣一 162, 164-65
 足立源一郎 561
 安土正夫 320
 ア・デ・プロスベロ 51
 阿天坊耀 533
 アナイス・ニン 464
 アナートル・フランス 312
 183, 554
 アニー・ベサント 375, 410
 姉崎正治 156
 アーネスト・A・ヴィゼリ
 ー 130-31
 アーネスト・ボーグナイン
 516
 阿野自由里 599, 601, 634
 アーノルド・ファンク 418,
 637
 安引宏 215
 アブ・オートマン 166
 アプトン・シンクレア 96
 A・A・プリル 261
 アプレイウス 682
 安部磯雄 678
 阿部主計 267
 安部公房 431, 571
 阿部定 224
 阿部次郎 100
 阿部達二 490
 阿部瓊夫 36

小田 光雄 (おだ・みつお)

1951年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。出版業に携わる。著書に『〈郊外〉の誕生と死』『郊外の果てへの旅／混住社会論』（いずれも論創社）、『図書館逍遙』（編書房）、『書店の近代』（平凡社）、『出版社と書店はいかにして消えていくか』などの出版状況論三部作、『出版状況クロニクルⅠ～Ⅴ』インタビュー集「出版人に聞く」シリーズ、『古本探究Ⅰ～Ⅲ』『古雑誌探究』（いずれも論創社）『古本屋散策』（第29回 Bunkamura ドゥマゴ文学賞受賞、論創社）、訳書『エマ・ゴールドマン自伝』（ばる出版）、エミール・ゾラ「ルーゴン＝マッカール叢書」シリーズ（論創社）などがある。個人ブログ【出版・読書メモランダム】<http://odamitsu.hatenablog.com/> に「出版状況クロニクル」を連載中。

近代出版史探索

2019年10月16日 初版第1刷印刷

2019年10月26日 初版第1刷発行

著 者 小田光雄

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／鳥井和昌

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1879-5 ©2019 Oda Mitsuo, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。